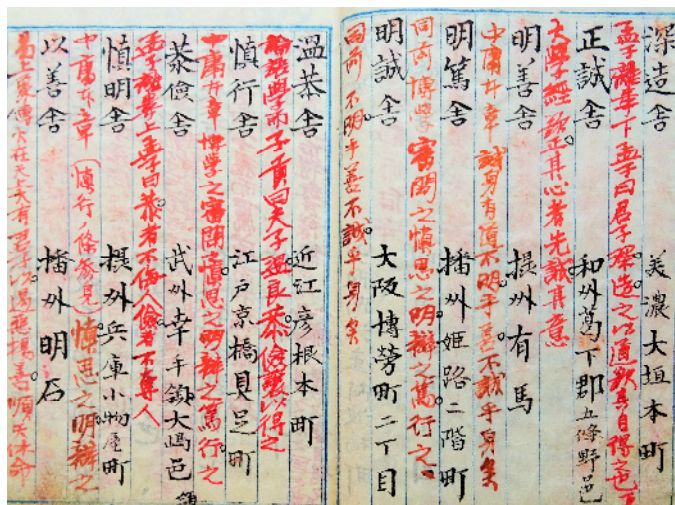




明誠舎所蔵『石門心学諸国舎號録』の一部。表 2 解説をご覧ください。

【目次】

巻頭言……副理事長 長谷川恵一……1

石門心学と「語り方」

……山東功……2

世界大戦後からの明誠舎史(その一)

……中尾敦子……4

第十八回勉強会・懇親会

京都・心学舎跡を訪ねて

……清水正博……6

行事の記録

……8

編集後記

……山田節子……8

【付】

石門心学諸国舎號録……表1・表2

石門心学文集『こころをみかく』

新刊・既刊ご案内……表3・表4

(題字 和田亮介)

【表紙写真説明】

表紙写真は明誠舎所蔵の『石門心学諸国舎號録』の一部である。

版刻・出版されている『諸国舎号一覽』から筆記したもので、併せて舎号の由来と想定される出典名・引用箇所を記載している。

内表紙に「可耕齋」と筆記されているので、筆録者は可耕齋とみて差し支えないだろう。可耕齋とは何者か定かではないが、石田梅岩の高弟・富岡以直の玄孫（やしやこ）である富岡鉄斎（代々心学が伝授されている）に師事した、画家の安藤耕斎ではないかと私は推測する。

舎号数は百七十舎あり、五樂舎から始まり、謹身舎で終わっている。これは明倫舎が所蔵する『諸国舎號』最終版の舎数・順序と一致している。

明誠舎の舎号の由来を、『中庸』第二十章からの引用として赤字で記載しているが、第二十一章の次の語句が正しい。

「自誠明謂之性、自明誠謂之教」。

読み下し文は、「誠なるより明らかなる、これを性と謂う。明らかなるより誠なる、これを教えと謂う」。意味は以下の通り。

「天の道として」誠が完全に備わっていて、そこから「現実的な立場で」ほんとうの善をはつきりと見抜いていくのを、それを本性そのままのことという。「反対に現実的な立場で」ほんとうの善をはつきり認識して、「それを積み上げていって」そこから完全な誠にゆきつくのを、それを「道を修める」教えのことという。「前者は自然な天の道としての聖人のこと、後者は人の行うべき道として教えを受ける人のことである。」

（以上、『大学・中庸』岩波文庫二〇六頁参照）

明誠舎の舎号にこの語句を選んだ師（恐らく手島堵庵）の思いが伝わってくる。

明誠舎に集う人々は、心学の教えに学び、工夫に工夫を重ね、善のなんたるかを知り、誠の道に行きつく者でありなさいと諭しているかのようだ。

私達は、聖人のように最初から本心の理解が備わって天に通じている者ではない。

心学社中一同は、「誠明」と「明誠」の違いをはつきりと認識し、日々の自己研鑽・修行と、先達の言動を謙虚に習うことにより、世に率先して誠の道を歩みなさいとの舎号の意味をかみしめて、尚一層精進を続けて参りたい。

（清水正博）

【巻頭言】 石門心学の「正直・儉約・勤勉」に

思う (二社) 心学明誠舎 副理事長 長谷川恵一

私が長年経営してきて思うことは、梅岩先生の「正直・儉約・勤勉」は本当に経営のエキスを語っておられるということだ。今社会で起こっているいくつかの不祥事は、この思想を経営の中核においていたら決して起こらなかったのと思う。梅岩先生の思想は実践から生まれただけに、内容がシンプルで分かりやすい。一見当たり前のことを言っているのではないかと思われるが、その背景はとても深い。儒教、仏教、神道を融合させて語る梅岩先生の内容は説得力に富む。

「正直」は経営の中で非常に大切な要素だ。経営の基本は「信用」なので特に自社の社員から正直であるかどうかは身近なのですぐに見分けられる。顧客からも信用第一でないで長期経営の視点からはいずれ見放されてしまう。その原点は経営者の「正直」な行動がベースとなっている。

「儉約」は長期経営のエキスと言っている。長期経営の視点から経営には激しい山谷がある。市場環境の激変に見舞われることは経営の常と言っている。そのような時、儉約による長年の蓄積がものをいう。儉約

も経営者の後ろ姿が社員には伝わっているもので、急に経費節減と言っても、日ごろ経営者自身儉約の実践をしていないと経費節減の浸透度は弱いだろう。いざというときにこれが実行されないと組織はもたないだけに重要なテーマだ。

「勤勉」には凡事徹底という言葉がふさわしいように思う。当たり前のことを当たり前にすることは実際には難しい。私は職場の整理整頓は経営のエキスだと思っている。家庭でもこどもの躾がベースでもあるが、企業も同じだと思う。最近は清掃業者に依頼するため職場はきれいに保たれているが、本当は社員自らが清掃をしたほうがいいと思っている。5S運動が提唱されているが、私がベトナムで工場見学した時に、多くの工場で5S運動をされているのに驚いた。これは素晴らしいことだと思う。多くの外国人が日本に来た時、街がきれいと言っていたけれど、これも梅岩先生の勤勉の一貫だと私は思っている。



京都塗師屋町・石田梅岩講舎跡碑（6頁、「京都・心学舎跡を訪ねて」参照）

石門心学と「語り方」

大阪府立大学学長補佐

高等教育推進機構教授

山東 功

林羅山が「天ハ尊ク地ハ卑シ。天ハタカク地ハ低シ。上下の差別アルゴトク、人ニモ又君ハタフトク、臣ハイヤシキゾ。ソノ上下ノ次第ヲ分テ、礼義・法度ト云コトハ定メテ、人ノ心ヲ治メラレタゾ。」(『春鑑抄』)と述べたように、近世身分社会において「上下定分の理」は、あまりにも当然のことであつた。そのような中、石田梅岩が「商人の道と云とも何ぞ士農工の道に替ること有らんや。孟子も道は一なりとの玉ふ。士農工商ともに天の一物なり、天に二つの道有らんや。」(『都鄙問答』巻之二)と喝破したことは、極めて大きな意味をもっている。商人の道が人間全体の道となるということは、身分に関わりなく道を求めるということとであり、ひいては教化という社会実践を促すことにもなったからである。梅岩を始祖とし、近世社会においてユニークな展開を遂げた「心学(石門心学)」は、庶民教化の言説として大いに注目されるが、その前提には「人の人たる道」を求めた梅岩の、徹底した人間観が存在していた。

ところで、心学の展開においては、その内容とともに

に「語り方」に対して、大いに注意が払われた点も注目する必要があるだろう。いわゆる「心学道話」と呼ばれるものであるが、それらは家庭教育と社会教育の二面において大いに普及していった。

白石正邦は『石門心学の研究』(一九二〇年、成美堂)の中で、「(一)務めて難語を避け、無学の者又は幼児に至るまで十分瞭解し得る様に懇篤平易なること(二)直覚の目的を以て多くの例証を取る、其は最も卑近にして理解し易きものを選択すること。(三)道歌を採用す。是れまた直覚記憶想像等を扶助する一方便であつて古来伝はれるもの又は特別に製作せるものもあり。要は平易にして口調の善きを以て特長とす。(四)神儒仏老莊等の教義を参酌す。」(四二頁)と、心学道話の特質についてまとめている。「懇篤平易」という言葉が象徴的であるが、受け手への押し付けではない、分かり易さを追求する心学の態度は、内容の卑俗化とは位相を異にするものであり、むしろ内容の深化とその咀嚼が要求される、極めて高度な教育実践であつたと言えるのである。

例えば、心学者の柴田鳩翁(一七八三〜一八三八)は、『鳩翁道話 壺之上』(天保六(一八三五)年)の中で以下のように述べている。

聖人(せいじん)の道(みち)もチンプンカンでは、女中(じょうちう)や子(こ)ども衆(しゆ)の耳(みみ)に通(つ

う)ぜぬ。心学(しんがく)道話(だうわ)は、識者(しきしや)のためにまふけました事(こと)ではござりませぬ。たゞ家業(かぎやう)におはれて隙(ひま)のない御百姓(おひやくしやう)や町人衆(てうにんしゆ)へ、聖人(せいじん)の道(みち)ある事をおしらせ申したいと、先師(せんし)の志(こころざし)でござりまするゆゑ、随分(ずいぶん)詞(ことば)をひらたうして、譬(たとへ)をとり、あるひはおとし話(ばなし)をいたして、理(り)に近(ち)かい事(こと)は神道(しんたう)でも仏道(ぶつどう)でも、何(なん)でもかでも、取(とり)こんでおはなし申す。

こうした特質(とくしつ)に関して、辻本雅史氏(つじまのりし)は「石門心学(しもんしんがく)は、それまでの「学問(がくもん)」からは疎外(そがい)されてきた層(そう)の民衆(みんしゆ)を対象(たいさう)とすることができた。(中略)政治教化(せいじけくわ)としてはもつとも困難(くわんなん)な対象(たいさう)を取り込んだのである。」「『思想(しゆしゆ)と教育(きやういく)のメディア史(めдиаいし)―近世(きんせい)日本の知(ち)の伝達(でんたつ)―』二〇一一、ペリかん社(ぺりかんしゃ)として、積極的(せきごく)な意義(いぎ)づけを行(な)っている。「もつとも困難(くわんなん)な対象(たいさう)」に対し、どのようにして言葉(ことば)を届(とど)けることができるのか。その意味(いみ)で、石門心学(しもんしんがく)は「学び」の対(たい)する「語り方(かた)」への関心(かんしん)を、大いに喚起(くわんき)するものであったとも言える。

石門心学(しもんしんがく)のような「学び」のあり方(かた)に對する着目(ちゃくもく)は、「なぜ石門心学(しもんしんがく)か」という問いかけとともに、「なぜ石門心学(しもんしんがく)が見出(みだ)されるのか」という、近代(きんだい)の教育(きやういく)や学知(がくち)

に對する再検討(さいけんとう)にも波及(はくし)していくこととなるだろう。石門心学(しもんしんがく)の顕彰(けんしょう)とは、究極(きうごく)的に「庶民(しよみん)」の發見(はつけん)であり、「学び」の普遍性(へんぱんせい)に對する確認(かくん)だからである。大学(だいがく)や研究所(けんきゅうじょ)のような高等教育・研究機関(けんきゅうきかん)において、いわば特權(とくけん)的に知(ち)を独占(とくせん)することなく、いわゆる公開性(こうかいせい)の原則(げんそく)の中で「学び」を牽引(けんいん)する機関(きかん)として、心学(しんがく)をはじめとする「学びの場(ば)」を再定置(さいていせい)することは、今日(こんにち)において極めて意義(いぎ)深いように思(おも)われる。この度(たび)、心学明誠舎(しんがくめいせいしゃ)とのご縁(ゆかり)を頂戴(ていだい)することとなったが、今後は、心学(しんがく)の精神(しんせい)とともに「学び」における「語り方(かた)」への注目(ちゅうもく)と、その実践(じっせん)についても微力(わいりき)を尽くしたいと思(おも)っている。向後(こうご)とも、宜(よろ)しくお願い(ごんがい)申し上げます。



京都学校歴史博物館にある明倫舎の模型
(6 頁、「京都・心学舎跡を訪ねて」参照)

世界大戦後からの明誠舎史（その一）

I. 大阪大空襲による明誠舎の壊滅と昭和二十年代の「心学」活動

（一社）心学明誠舎 副理事長 中尾敦子

明治から大正にかけて、維新以後大阪に残った他舎に比して、衰退を免れた明誠舎は中核になる人は少しづつ変わりながらも、船場の街で確実な活動が根づいていた。

しかし、一九四五年の大阪大空襲は明誠舎舎屋、都講たちにも壊滅的な打撃をもたらした。南区竹屋町に移転していた建造物は被災し、理事長は行方不明、財政を中心で負担していた豊田一族も余裕を失い、舎員の大半は罹災、死亡した。明治三八年に取得した法人格を残すだけで活動は休止し、戦後復興の喧騒の中で忘れ去られたままであった。

時代は占領軍アメリカを中心とした西洋文化に影響されて、国民は西洋文化とくにアメリカの暮らしや考え方に迎合するかのようになり、勤勉な国民性もあり、総力で経済成長を達成させていく道を歩み始めていた。この混乱の中、忘れ去られたようでもあった『心学』へ新たな視点が向けられ始めたのは、高松宮邸で精神復興・道義再建について石川謙、下村寿一（元文部省社会教育局長）、山田敬斎参前舎主、田辺留蔵（第十四代参前舎主）の四氏が招かれて、『戦後の思想混乱を救うには心学が良

いのでは…』などの提案が討議され、心学を現代生活に生かす事が目された。

その前後、一九四八年（昭和二十三年）に一徳会（柴田謙堂と、高崎正風とで明治四〇年に結成されている）を併合し、『社団法人石門心学会』が結成されていた。理事長には石川謙、副会長下村寿一が就任し、心学の復興に向けた体制がここにも作られ、各地で心学講演会が催され、山形・京都・広島・群馬・静岡・愛知などには支部が設けられ、心学を現代に生かす運動が全国各地で始まった。

一九五一（昭和二六年）年に、石門心学会会長に小倉正恒（住友関連）が就任すると、大阪における活動を進めるために、田中良雄（住友本社常務理事・大阪市教育委員長）へ尽力を懇請された。加え、京都明倫舎柴田実舎主（京都大学教授）、竹中靖一（近畿大学教授）などの協議で、一九五四年（昭和二九年）に、明誠舎再発足の協議会が持たれた。大阪を拠点とする住友系列教社から、財政支援を確保し、復興の準備がなされた。

★舎屋・財産なく、舎員離散の中で甦る「社団法人心学明誠舎」活動の再生

一九五五年（昭和三十年）、戦後第一回の心学明誠舎例会が大阪市立東高校の洋間で産声を上げた。

再興した講舎活動は事務所を竹中靖一居宅に置き、会場は大阪市立東高校教室など、下校後の公立高校教室などが使われた。

この頃、わが国の経済は驚異的な復興を遂げており、世界各国から注目された。『清廉の経営』につながる東洋の経営思想として海外から「心学」が注目されはじめた。加え、明誠舎を主宰する竹中靖一の上梓した『石門心学の経済思想』が学士院賞を得たことも重なり、心学講舎活動は注目される時代を迎えた。(昭和三十年～四十年代・一九五五年～一九七〇年代)

【講舎定例会内容】

・講師の主たるメンバーは、京都大学教授柴田実、近畿大教授竹中靖一など心学にかかわる研究者が中心で、石川謙はじめ、東京参前舎山田敬齊なども数度招聘している。石門心学会や各地の講舎活動者、研究活動家などの交流を重ねている様子がみうけられる。参考文献として、例会の演題と講師などについては「明誠舎沿革略」第六章(第一回～昭和三十年)第二章(第二回～昭和五十年四月)、事後は「私家本沿革略続編」(竹中靖子作成)に掲載されている(第二八一回～第二九八回)

・竹中の講話は主に経済社会における心学思想からの視点で、参加する経済界、企業人などの商道德を思考するようなテーマがみられる。

・理事長田中良雄は、設立記念講演で講舎再興に関して所信表明をし、その内容に沿った現代における心学、心学講舎活動の役目を課題に何度かの例会を受け持った。

その内容は「人間随想」などと題し随筆集が組まれ刊行されている。特筆されることは、現代の暮らしにそう実践

的講話であった。『私は一隅を照らすものでありたい。わたしの受け持つ一隅がいかにはなく、みじめなものであっても、いつもほのかに照らしてゆきたい』(田中良雄・語録より)

・自宅提供していた竹中は、二九七回までほぼ毎回、欠けることなく講師を務めた。一方で、舎員が、講師を引き受ける事もあった。心学に関する専門的な知見が演題になることだけでなく、多様な分野から、多種の人々が演壇に立っている事が伺いしれる。宮本又次、難波田春夫、山田憲太郎、景山哲夫、末中哲夫、大塚俊郎など多様な分野の卓越した研究者の名が多数、記録されている。

①後に竹中没後第一期理事長を受けることになる、加地伸行大阪大学名誉教授が例会に初登壇した記録が残されている(第一九九回、昭和五十年二月、『中国の孝』)

②経済界で活躍する人、企業人が登壇することはこの間には希少であった。理事長の田中良雄のほか、次期理事長を受けた竹田義蔵(武田薬品、吉富製薬など)ほか、カネボウヤマシロ製薬会長松本秀俊、日本フレートライナー社長遠藤鉄二、日本生命済生会相談役浜田勝巳、朝日新聞社社員勝島喜一郎の名前を見つけることができる。(明誠舎沿革略)

③『都鄙問答』に特化してまなぶ事が第五八回(昭和四六)から登場している。

【以下、次号に続く】

第十八回勉強会・懇親会

京都・心学舎跡を訪ねて

(一社) 心学明誠舎専務理事 清水正博

二〇一六年十二月十一日(日) 午後、心学明誠舎主催、第十八回勉強会・懇親会「京都・石門心学舎跡を訪ねて」を開催した。京阪電鉄清水五条を出発し、京都芸術センターまで市内八力所の心学関連施設を巡るハードな町歩きでした。またオプションとして終了後に懇親会を行いました。当日のコースは以下の通りです。

①「心学修正舎跡」碑(麴屋町通り、朝日神明社隣)、
②学校歴史博物館(和崎光太郎学芸員より館内の説明、明倫舎建物の模型、心学いろは歌などが掲示)、
◇途中の寺町通りの永養寺に住友政友の墓、了雲師の墓あり。

③「手島堵庵五楽舎跡」碑(京都市教育会建立、一九一七年) 富小路六角上る西側

④「石田梅岩邸跡」碑(京都市教育会建立、一九一六年) 堺町通蛸薬師上る東側

⑤「石田梅岩講舎跡」碑(塗師屋町建立、二〇一五年)、
車屋町御池上る東側(花岡正町内会長より建碑のいき

さつの説明)

⑥明倫舎(手島堵庵書の扁額、梅岩自筆書などを展示、柴田みほ子氏より説明・質疑応答) 新町通り二条上る
⑦無名舎・京都生活工芸館(当時、心学修正舎が毎月会輔)

⑧京都芸術センター、図書館に『明倫誌』(明倫舎から明倫小学校・京都芸術センターへの歴史が記載)

⑨懇親会「串くら」

現地にてご説明頂いた、京都市学校歴史博物館の和崎光太郎学芸員、塗師屋町町内会長花岡正様、明倫舎主の柴田なほ子様、亀岡からお越しの石田二郎様など、多くの皆様にご助力に心より御礼を申し上げます。

また寒空の中をご参加頂いた三十名の皆さまと共に、石田梅岩先生、手島堵庵先生ら京都心学発祥の地における史跡に触れることができ、限らない喜びです。

三百年前、この地における梅岩先生の「下京へ商ひに出たまふにも、書物を懐中し、少しのいとまをも心がけまなびたまへり。朝は朋輩の起きざるうちに、二階の窓に向ひ書を見たまひ、夜は人寝静まりて後、書を見たまひて、主人の用事少しもかきたまふことなし」との刻苦奮励により、その後、石門心学が全国に広がり、多くの人々に影響を与え今日に至ったかと思うと感慨無量です。

今回の視察に当たり六角通りが梅岩先生ご健在の



⑤石田梅岩講舎跡碑の前にて写す

当時、心学の中心地であることが判りました。

享保十四

(一七二九)

年に開講した地が手狭になり、元文二(一七三七)年に移転した堺町通りの碑、移転先を斡旋した至近の高弟・齋藤全門や、後に江戸

に梅岩教学を伝えた慈音尼の寄宿先の木村重光の邸、堵庵が最初の講舎を開いた五楽舎の碑は、全て六角通りの直近にあります。堺町六角を中心とした地が、初期心学者達の集った石門心学のパワースポットであることを、この度の会を通じて体感しました。私は六角通を「心学の道」と呼びたいと思っています。

また三舎印を発行した三舎のうち、修正舎跡碑と明倫舎を視察できました。とりわけ明倫舎では掛け軸(梅

岩・堵庵・自筆軸)や古書に囲まれた会輔の間を見せて頂きました。更に明倫舎に関わる京都市学校歴史博物館や京都芸術センターも訪れることができました。

懇親会の築百余年の京町家「串くら」では、十八名が参加しコース料理を堪能しながら、当日の反省と今後の「道」について、忌憚のない貴重な情報交換の場となりました。

協力頂いた関係者の皆様に感謝すると共に、更に学びを深めて参りたいと思います。貴重な師走の午後でした。

なお今年、二〇一七年十二月九日(土)に第二十回勉強会・懇親会として、大阪市内にて「心学明誠舎跡を訪ねる」を開催予定です。明誠舎は戦前までに四回移転しています。①心斎橋飾屋町(一七八五年創設、②船場金田町(現博労町一丁目、一七九二年移転)、③南区長堀橋筋一丁目(一八八一年・明治十四年移転、明誠舎跡の碑が建つ)、④南区竹屋町九番地(現在の島之内一丁目、一九三八年・昭和十三年に移転)を訪ねます。どうぞ奮ってのご参加をお待ちしています。

これからも、明誠舎として有為な内容のセミナーを行って参ります。関係者の皆様のご支援に感謝すると今後共、忌憚のないご意見をお寄せ下さい。

行事の記録（平成二八年度）

【ひらのまちギャラリー・サロン】

●平成二八年五月二七日（金） 講師…黒川孝宏氏（亀岡市文化資料館館長） 演題…石田梅岩の心とその言葉

【サマーセミナー】

●平成二八年六月十日（金） 講師…末永國紀氏（同志社大学教授・近江商人郷土資料館館長） 演題…近江商人と三方よし

●平成二八年七月二二日（金） 講師…中尾敦子氏（弊会副理事長） 演題…心学明誠舎通史・世界大戦後の講舎活動変遷と二二世紀への展望

【心学普及講座】

●平成二八年七月二二日（木） 演者…林家染雀師 講師…中尾敦子氏（弊会副理事長） 演題…伝統芸能「落語」の世界と心学

●平成二八年十二月十五日（木） 演者…林家染雀師 講師…中尾敦子氏（弊会副理事長） 演題…伝統芸能「落語」の世界に心学の姿を見つけて

【都鄙問答研修会】

●平成二八年九月三日（土） 第六回研修会 講師…高野秀晴氏（仁愛大学准教授）

【公開講座フェスタ】

●平成二八年十一月十四日（月） 講師…中村春作氏（弊会理事・広島大学大学院教授） 演題…心学とは何を語る学問か

【石門心学講演会】

●平成二八年十一月四日（金） 第九回 講師…ポール・B・ワット氏（早稲田大学教授） 演題…私と石田梅岩 演者…春野恵子師・一風亭初月師 演目…両国夫婦火花

【早春セミナー】

●平成二九年一月十八日（水） 講師…谷直樹氏（住まいのミュージアム館長） 演題…浪花のライフスタイルと住まいと暮らしを中心に

●平成二九年二月八日（水） 講師…塚本喜三郎氏（ツカキグループ代表取締役・塚喜商事株代表取締役） 演題…「三方よし」近江商人の商法

【勉強会】

●平成二八年十二月十一日（日） 京都・石門心学舎跡を訪ねて

●平成二九年三月二二日（火） 講師…和田真治氏（南海電鉄株） 演題…まちづくりに学ぶ人生

【梅岩先生命日事業】

●平成二八年九月二四日（土） 鳥辺山にてお墓参り 兵衛麩にて講話と資料閲覧

【編集後記】

秋の気配を感じると、今年も舎報の発行が近ういたとうれしくなる。明治維新でスムーズに資本主義に移行できた一つが石田梅岩の教えであったように、今の時代が正しい将来を導くために石田梅岩はなくてはならない教えと感じながら、石門心学の教えを広めていきたいと思います。（Y記）

心学明誠舎発行物案内 石門心学文集『こころをみがく』

(若干、在庫がありますので、お求め下さい。各巻 600 円、送料 92 円)

第五集 2015 年刊……○里山資本主義と日本の復活(藻谷浩介) ○金子直吉の旺盛な起業家精神の挫折が遺したもの～平成バブル経済の破綻にみる企業倫理の崩壊～(大塚融) ○老舗学から見た日本型理念経営の流れ(前川洋一郎) ○泊園書院と大阪の学問・文化～藤澤南岳・黄鵠・黄坡の碑文～(西田孝司) ○魂の商人～石田梅岩が語ったこと(山岡正義) ○石門心学に見る「学問」と「教化」(高野秀晴)

第四集 2014 年刊……○二十一世紀の国富論(原丈人) ○商人としての学び～人はなぜ働き、なぜ生きるのか～(藤尾政弘) ○事業家の夢と志(小林宏至) ○グローバル人材の育成(長谷川恵一) ○経世済民(中井政嗣) ○近世日本における「教諭」の思想－「小学」本の普及と庶民教育(中村春作) ○近世往来物に見る心の教育(和田充弘)

第三集 2013 年刊……○市場化の時代に見直す江戸期商人道(松尾匡) ○民の学びと社会貢献～日本を支えるもう一つの力～(堀田昇吾) ○平生飢三郎～日本人の商道徳と教育～(藤本建夫) ○現代に生きる渋沢栄一(井上潤) ○大坂心学を源流とする阿波半田の心学－文化と経済の交流－(篠原俊次) ○金を貸す・時を貸す～人を育てる・企業を育てる～(勝田泰久)

第二集 2011 年刊……○石田梅岩の学問と思想に学ぶ(上田正昭) ○商業界精神と梅岩の思想(倉本初夫) ○食の商いを通じて学んだこと(小嶋淳司) ○なすびの花(玉置半兵衛) ○『都鄙問答』を読む－梅岩の学問観－(辻本雅史) ○絵入りの「学問」－手島堵庵の『施印』を読む－(高野秀晴) ○二宮金次郎のいきさま～何が「豊かさ」なのか～(中桐万里子) ○国難を乗り越えるために一なにわ大阪の教訓－(堀井良股)

第一集 2009 年刊……○見直そう、石田梅岩の思想(平田雅彦) ○梅岩の思想と運動(辻本雅史) ○隠居と教育－生涯学習に向けて－、隠居による教化運動－手島堵庵について－(高野秀晴) ○隠居と教育－生涯学習に向けて－、「臍隠居」の話－隠居とは何者なのか－(高野秀晴) ○明誠舎をつくった人と書物(山中浩之) ○現代に生きる石門心学(清水正博) ○歴史に学ぶ大阪の人間力(堀井良股) ○大阪に現存する市民塾「心学明誠舎」の通史と関わった人たち(中尾敦子)



石門心学文集『こころをみがく』第六号

平成 29 年 11 月 1 日 発行のご案内
(定価 600 円、送料 92 円)

【記事紹介】

長野享司「石田梅岩と論語」

黒川孝宏「石田梅岩 ～学びの心とその言葉～」

末永國紀「近江商人と三方よし」

中尾敦子「心学講舎活動のこれまでこれから～世界大戦後、明誠舎活動を
支えた『都講』たちに焦点をあてて～」

ポール・ワット「私と石田梅岩」

中村春作「心学とは何を語る学問か」

塚本喜左衛門「『三方よし』近江商人の商法」

辻本雅史「貝原益軒と石田梅岩～民衆のための学の争奪～」

『みち』第4号 平成 29 年 11 月 1 日 発行
編集・発行 一般社団法人 心学明誠舎 理事長 堀井良殷

〒556-0011 大阪府大阪市浪速区難波中 3-13-1 エール学園 3 号館 701

Tel : 06-6632-0041 Fax : 06-6632-6100

E-mail : meiseisha@ehle.ac.jp <http://www.ehle.ac.jp/meiseisha/>